

近畿大学 産業理工学部

創立50周年記念誌

SINCE 1966-2016

抜粋版



近畿大学
KINDAI UNIVERSITY

本PDFは 近畿大学 産業理工学部 創立50周年
記念誌 から次のページを抜粋したものです。

■p10-11 沿革

■p12-15 産業理工学部 50年の歩み

■p60-67 写真で綴る50年

沿革

昭和40年10月25日	第二工学部校舎本館 (5,998.30㎡) 1号館 (2,970.00㎡) 竣工
昭和41年 3月18日	第二工学部一部 (工業化学科、電気工学科、建築学科)、 二部 (工業化学科、建築学科) 設置認可
昭和41年 4月 1日	学部長岡部金治郎就任 近畿大学図書館分館を本館2階に開館
昭和41年 4月21日	開学式、第1回入学式
昭和42年 3月10日	2号館 (4,072.46㎡) 竣工
昭和42年10月 1日	学部長馬場為二就任
昭和43年11月30日	高電圧実験室 (405.00㎡) 竣工
昭和45年 3月 3日	体育館 (3,440.70㎡) 竣工
昭和45年 4月 1日	二部 (工業化学科) 学生募集停止
昭和46年12月 1日	クラブハウス (725.20㎡) 竣工
昭和49年10月 1日	学部長安田拓就任
昭和50年 3月30日	学生食堂 (595.35㎡) 竣工
昭和52年 2月 1日	建築構造実験室 (457.44㎡) 竣工
昭和56年 9月 1日	本館2階に電子計算機室設置
昭和57年10月 1日	学部長三根剛四郎就任
昭和59年 4月 1日	二部 (建築学科) 学生募集停止
昭和59年 6月30日	木材加工工作室 (149.04㎡) 竣工
昭和60年 4月 1日	第二工学部を九州工学部に学部名変更
昭和61年10月 1日	学部長本郷英士就任
昭和61年10月20日	学生駐輪場竣工
昭和61年12月23日	産業デザイン学科、経営工学科増設認可
昭和62年 3月30日	3号館 (5,718.94㎡) 竣工
昭和62年 4月28日	第2クラブハウス (198.74㎡) 竣工
昭和62年 9月29日	有害物質処理室 (158.97㎡) 竣工
昭和62年 3月31日	図書館・電算機棟 (5,535.06㎡) 竣工
昭和63年 9月29日	建築材料実験計測室 (18.8㎡) 竣工
平成元年 3月31日	二部 (工業化学科、建築学科) 廃止
平成 2年 6月 8日	近畿大学学園章および教職員記章の制定
平成 2年 6月27日	第二学生食堂 (301.39㎡) 竣工
平成 2年10月30日	学生駐車場竣工
平成 4年 3月19日	大学院産業技術研究科 (物質工学、電子情報工学) 修士課程設置認可
平成 4年 4月 1日	臨時定員増 大学院産業技術研究科長菊川清就任
平成 4年 5月 1日	インターネット接続
平成 4年 7月18日	創設25周年記念式典
平成 4年10月 1日	学部長井波益雄就任
平成 6年 3月16日	大学院産業技術研究科 (造形学、経営工学) 修士課程、(物質工学、電子情報工学) 博士課程増設認可

平成 6年 6月17日	バウビュッテ (ログハウス) (184.5㎡) 竣工
平成 6年 9月10日	建築学科環境実験室竣工 (57.75㎡)
平成 7年 2月 7日	学術情報センター目録所在サービス加入
平成 7年12月22日	大学院産業技術研究科 (造形学、経営工学) 博士課程増設認可
平成 8年 1月 9日	実験棟 (5号館) 建設に係る設計開始
平成 8年 3月19日	進入道路周辺整備工事完了
平成 8年 4月 1日	産業技術研究科博士課程 (造形学専攻、経営工学専攻) 設置 (財)大学基準協会加盟
平成 8年 5月30日	グラウンド奥造成工事祈願祭 (平成10年9月竣工)
平成 8年 9月20日	第2学生駐車場増設
平成 8年10月 1日	学部長曾根靖史就任
平成10年 4月 1日	5号館竣工
平成11年 4月 1日	電気工学科を電気情報工学科に学科名変更
平成12年 4月 1日	工業化学科を生物環境化学科に、経営工学科を経営情報学科に学科名変更
平成12年10月 1日	学部長菊川清就任
平成13年 4月 1日	分子工学研究所 (ヘンケル先端技術リサーチセンター) 竣工
平成13年 4月 1日	附属福岡高校、九州工学部キャンパスへ移転
平成16年 4月 1日	九州工学部を産業理工学部 (生物環境化学科、電気通信工学科、建築・デザイン学科、 情報学科、経営コミュニケーション学科) に改組
平成16年10月 1日	学部長小野正行就任
平成19年 4月 1日	分子工学研究所 (JSR機能材料リサーチセンター) 竣工
平成20年 4月 1日	経営コミュニケーション学科を経営ビジネス学科に学科名変更
平成20年10月 1日	学部長長谷川徹也就任
平成20年10月 1日	新学生食堂竣工
平成21年 4月 1日	硬式野球部創部
平成24年10月 1日	学部長荒川剛就任
平成25年 4月 1日	産業理工学研究科修士課程 (産業理工学専攻) 設置
平成27年 4月 1日	産業理工学研究科博士課程 (産業理工学専攻) 設置
平成28年 4月 1日	電気通信工学科を電気電子工学科に学科名変更
平成28年 6月 4日	創設50周年記念式典



産業理工学部50年の歩み

近畿大学産業理工学部は昭和41年、福岡県飯塚市に近畿大学第二工学部として設立されて以来、時代、社会の要請に応じて改組・改変を重ねてきた。

第二工学部設立から、現在の産業理工学部に至るまでの激動の歴史を記す。

第二工学部設立の動機

筑豊は明治、大正、昭和の三代にわたり、日本における最重要炭産地として石炭産業が発展し続けた地域であった。しかしエネルギー革命により、昭和30年代に入ると炭鉱閉山が相次ぎ、人口も急激に減少し社会的問題も発生した。そこで産炭地振興計画の模索が切実な課題として浮上してきた。

このような時期、昭和39年4月28日、飯塚市市議員岡部隆氏（近畿大学の前身、大阪理工科大学の卒業生）が近畿大学世耕弘一初代総長を訪問されて、飯塚市に大学分校のことを相談されたのが始まりであった。

総長視察と設立への進展

昭和39年6月22日、青山了飯塚市長と浅野一郎市議会議長は、上阪して正式に近畿大学分校設置方を要望された。7月には近畿大学寺坂八郎事務局長（のち常任理事）が候補地視察のため来飯された。敷地選定についての大学側の要望は、①最寄りの駅から20分程度で行けること、②静かな地、③丘陵地帯、④樹木の繁茂する所などであった。その後市側は急きょ、鉱害や障害物の有無を考慮し候補地を物色して二ヶ所にしほり待機した。

昭和39年8月21日、世耕総長他5名が視察されることになった。その時の様子は江藤大作氏（元飯塚商工会議所専務理事）によると、飯塚市を一望できる八木山展望台に紅白幕を張り、市長初め有志の人達が出迎えた。そして市街地の沿道には市民総出で旗を振って歓迎したという。この市民の熱意に世耕総長も感動された。

その時、候補地の案内役を務められた当時市産炭地振興課長（のち福祉部長）であった宇佐波近氏は次のように回想される。柏の森に案内した時は真夏の炎天下であったが、上衣も脱がれず熱心に敷地を見聞された。途中で冷水を差上げると、「あ、これで生き

かえった」と申され敷地も非常に気に入られた様子であった。その時の温かみのある、標々しい姿が今でも忘れられないという。

その後設立への動きが急速に進展するが、敷地の大半が麻生産業の所有地であった。津野貞俊氏（新興塗装社長）によれば、市側は花村樹昌氏（当時県会議員のち県会議長）に依頼して交渉することになった。麻生セメント社長麻生大賀吉氏は、最初難色を示された。花村氏は持前の気迫でねばり強く説得されて最終的には教育熱心な麻生社長も快諾されて現在地に決定することになった。いま考えると立地・環境・交通体系も良く世耕総長の判断は先見の明があったというべきであろう。この時期近畿大学側と交渉を持たれた地元有志の話を総合すると、世耕総長には東南アジア・中国の留学生を受け入れて九州を技術交流の拠点として海外との親交を深めたいとの理想があり開設には積極的だったという。

昭和39年9月17日、飯塚市では近畿大学分校誘致についての臨時市議会が招集されて議決された。10月15日第二工学部設立準備事務所が、近畿大学附属女子高校内に設置された。その後近畿大学側と市側両者がタイアップして、設立へ向けて準備作業が始まった。地元商工会議所各種団体、近隣の3市8町長連名で陳情書を大学設置審議会へ提出、市長及び議長は総理大臣、文部大臣へ上京して陳情に奔走された。11月には私学審議会委員、大学設置審議会委員が相次いで視察のため来飯した。しかし造成工事もあり建築工事が思うように捗らず、校舎建築不十分との理由で開設は見送られることになった。そして昭和40年10月校舎も落成し昭和41年4月1日開校した。学園都市を目指す飯塚市にとっても意義深い開校であった。

世耕総長はベルリン大学で政治学、経済学を学び帰国後は日大教授、理事を歴任され、その後代議士当選、昭和34年の岸内閣の国務相として政界でも活躍された。第二工学部設立には意欲的だったが、開学を待たずに昭和40年4月27日死去された。体育館前に世耕総長の胸像がある。当時のことを知る人には思い出深いものであろう。



建設予定地視察中の世耕弘一初代総長
(現在の体育館付近)



世耕総長の胸像 (体育館前)

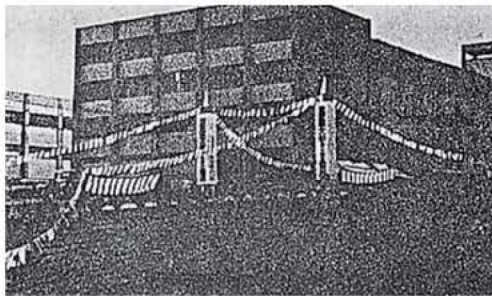
第二工学部創設準備事務所と開設

創設準備事務所は、かつて飯塚市議会事務局長の要職にあった吉松胤房氏が事務長として就任、小規模ながら事務組織の形態を整えることになった。以後第二工学部の設置認可申請に関連して、鹿島建設との施工上の打合せ、飯塚市との協議、近畿大学附属女子高校移管に関する県への諸手続など諸々の幅濶する懸案事項の山積するなかで、その処理に追われる毎日が続いた。

近畿大学本部からは寺坂八郎事務局長、宮本陸治教務部次長をはじめその他の役職者の来校が頻繁にあり、指示や協力を得ながら諸般の状況に対応していった。一方、現地にいる吉松事務長は、持ち前の敏腕を発揮して内外の諸事を精力的に処理していった。

昭和40年6月23日、附属女子校内にあった第二工学部創設準備事務所は、竣工した柏の森の第二工学部本館に移転した。新任職員を迎えて清新の気風に満ちて活況を呈した。そして昭和40年度設置認可に向けての作業が開始された。鹿島建設の施工も順調に進捗して本館は昭和40年6月上旬、一号館は9月中旬に竣工した。10月25日には第二工学部、女子短大の落成式が盛大に行われた。

その後大学進学説明会、1号館の実験用機械器具類の搬入、配置、整備など全般の準備にかかる。本部からは関係職員が来校、第二工学部職員と一緒に連日深夜までの準備で多忙を極めた。



近畿大学第二工学部の開学式。当日は旧本館と1号館のみで白亜の建物が映えていました。(昭和41年4月)

昭和40年11月9日、昭和40年度第二工学部設置認可申請に伴う私大審議会の実査、11月12日大学設置審議会(主査大山義年東京工科大学長)の実査が行われた。施設、設備など答申の基準を満たし完璧な状態であったので、翌日の大学設置審議会の講評も大変よかったということである。

昭和40年12月18日、大学設置審議会から第二工学部の設置許可が文部省に答申された。ただちに学生募集運動が本格的に展開され、新任職員の着任もあり、事務組織も一段と充実した体制を整えることになった。

昭和41年1月23日、昭和41年度第二工学部推薦入学選考試験、2月24日、25日第一次入学試験、3月29日、30日第二次入学試験が実地されるなど、目まぐるしい限りの学生募集、入学試験などの実施であった。

同年4月21日、第二工学部第1回入学式が挙げられた。

学部改組と新学科増設への動き

昭和41年4月開学後は教育内容や研究設備なども充実された。初めは学部の知名度も低く学科内容も一般には理解されていなかった。そのため教職員一体となり高校訪問、企業訪問など広報活動も精力的に行った。この時の苦労は教職員全員同じ思いであろう。しかし、いま振り返ると懐かしい思い出もなっている。昭和40年代後半になると大学としての体制も整い、経済的な高度成長の影響もあり卒業生も大手企業を初め広く社会に送り出すようになった。一応軌道に乗り始めたかに思われた。

しかし昭和50年代になると不況が発生した。合理化で完全失業者が100万人を突破し不況が深刻化し、昭和52年には全国的に大学進学率も11年振りに低下し始めた。日本の新設地方大学でも深刻な問題となった。この頃アメリカの大学でも同じ現象が生じ、高等教育は一体どうなるかを問う「3000未来」というレポートが出されて話題を呼んだ。

第二工学部でも危機感が高まり、今後の大学の在り

方について深夜まで何度となく会合が重ねられた。その結果、昭和57年4月学科増設委員会、1月には市民公開講座開講、昭和58年第二工学部長期計画案がまとめられるなど懸命の努力がなされた。

学部名も、第二工学部では二部と誤解を招くそれもあり、昭和60年4月18日九州工学部に変更された。

学科増設については、各学科および事務部より選出された委員により、渉外、地域、産業、企業などを分担して作業が進められた。学科内容については①人間生活、文科系に近い系統の学科、②既存学科とは異質の内容の学科という基本方針で、各学科より、電子情報、機電工学、経営管理、工業意匠、生活学科が提案された。幾多の紆余曲折を経て、産業デザイン、経営工学、電子情報の3学科に焦点がしぼられた。

昭和57年6月3日、飯塚青年会議所（理事長竹下茂木氏）主催で「地域社会の要望と運動体制」と題して、第1回会合がもたれた。第2回目は7月4日、高鍋徹男飯塚市長、安田拓学部長も出席して地域文教問題懇談会が開かれた。工学部長より大学の近況報告があり、近隣の高校側からも新設学科についての要望等が提出された。

昭和57年7月21日、近畿大学第二工学部新学科増設促進期成会が、地域諸団体を統合して設立された。期成会長は創設時大学用地の件で尽力された花村樹昌氏（飯塚商工会議所会頭）であった。その後商工会議所において地域諸団体と大学側との会合がもたれ意見交換が行われて、増設問題についての運動が始まった。昭和59年5月14日、花村期成会会長他4名は上阪して近畿大学本部に学科増設を陳情、8月31日期成会会長他13名は世耕政隆第2代総長に参議院会館にて学科増設方を陳情された。また機会あるごとに学科増設を支援された。

石炭産業が崩壊して工業化社会より高度情報化社会に向かうこの転換期に、いち早く近畿大学九州工学部、九州短期大学を誘致し、その後九州工業大学情報工学部、各種研究機関が設置されるなど学園都市づくりの基礎が築かれた。この厳しい時期に地域のリーダー役であった花村樹昌氏を始め歴代飯塚市長、青山了、高鍋徹男、田中耕介各氏の功績は大きい。

長期計画と新学科増設

増設問題は昭和60年9月、近畿大学本部に新学科設置準備委員会が組織されて急速に進展した。長期計画に基づき2学科増設と電気工学科定員増の方向で検討を進めることになった。新設学科の必要性、施設設備、年次計画、財政計画などの立案について、近畿大学本部の担当者を交えて会合が重ねられた。同時に文部省との折衝も行われるようになった。

昭和61年2月、近畿大学本部案として産業デザイン学科（定員60名）、経営工学科（定員80名）の新設学科の提示があり、これではほぼ方向が決定した。同年6月30日、文部省に申請手続を行うことになったので、学科の内容、教員組織を急いで固めなければならなかった。その後、教員組織も整い文部省に学科増設を申請した。

このようにして昭和61年10月1日、九州工学部に産業デザイン学科、経営工学科増設が認可された。



3号館



4号館

写真で綴る50年



昭和39年8月、飯塚市を一望できる八木山展望台から飯塚方面を望む世耕弘一初代総長



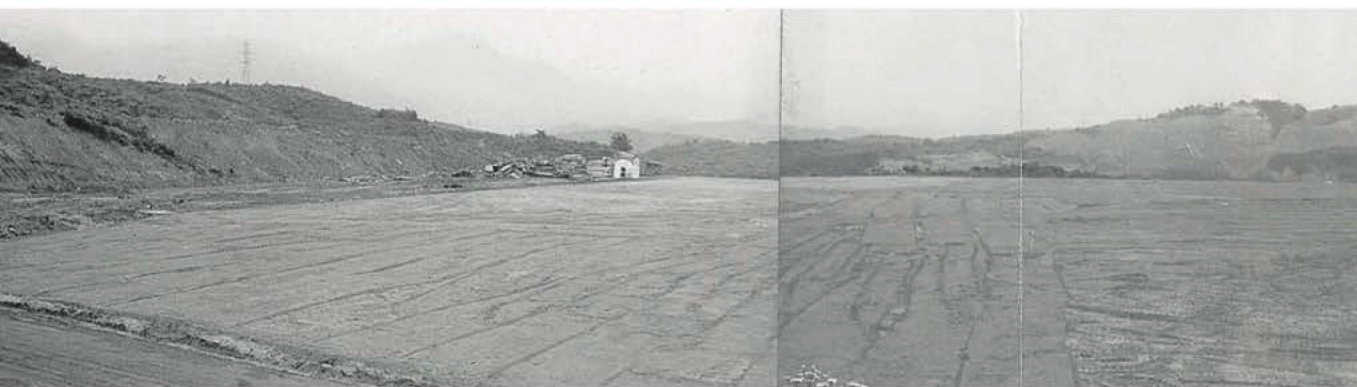
沿道の市民も総出で旗を振って出迎え。



飯塚市役所に到着。
飯塚商工会議所、新飯塚商工団からも熱烈な歓迎を受ける。



飯塚市柏の森にて、キャンパス建設予定地を視察する世耕総長一行。



柏の森の地に30,600㎡の土地造成工事が完了し、昭和40年4月開学へむけての第一歩が進みはじめている（昭和39年）



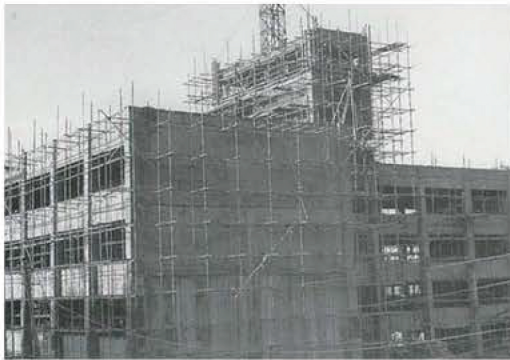
土地造成風景。まだまだ周辺は緑一色。現図書館電算棟の付近。
(昭和39年)



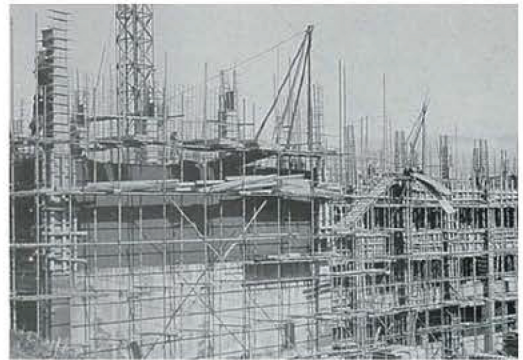
体育の時によく草むしりをしたグラウンドの造成時の風景。
(昭和39年)



グラウンドより眺めた旧本館の新築工事で、ほぼ4階までの外観は出来上がり、給水槽のある塔屋部分の工事前の建物。
(昭和39年10月) (現1号館)



旧本館の新築工事で、このようになると4階部分の上に塔屋部分が姿を現している。昭和40年2月頃の工事現場。
(やっとならぶ現況の建物に近づいてきました。なつかしく思われる方も…)



昭和41年10月には、1号館からグラウンド側の2号館への研究室新築工事も始まっている。(現1号館西側)



筑豊本線を走るSL
(昭和40年代)



第2回大学祭（昭和43年）。当時の大学祭では、行事として行列があり、飯塚市内にくり出して、応援団が演舞などを行った。



朝の通学風景。
バス停は、現在と同じ位置にあった。
（昭和50年頃）



旧本館2階にあった図書館の閲覧室はいつも利用する学生で溢れていた。
（昭和49年頃の閲覧室内部）

右：1号館
左：体育館



工業化学科



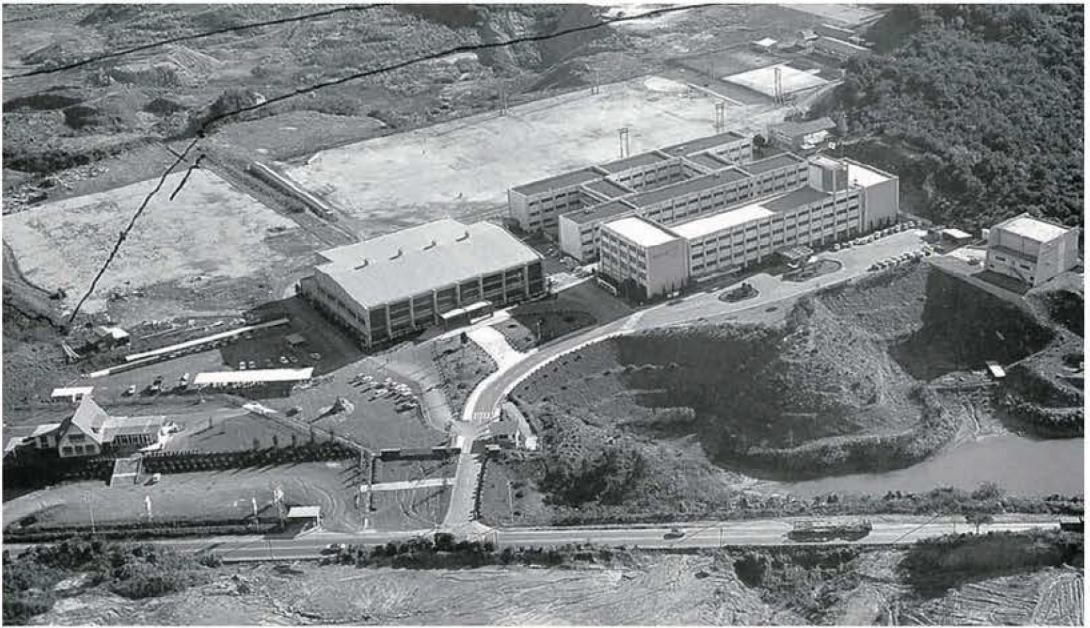
建築学科



第二工学部食堂内部。(昭和43年)



昭和43年頃の「グリル近畿」。当時としてはモダンな建物でメニューも豊富、学生に大変人気があった。



学部周囲は、また近代産業のはしりのボタ山が数多く見受けられる。
(昭和45年11月10日の学部の全景)



電気工学科



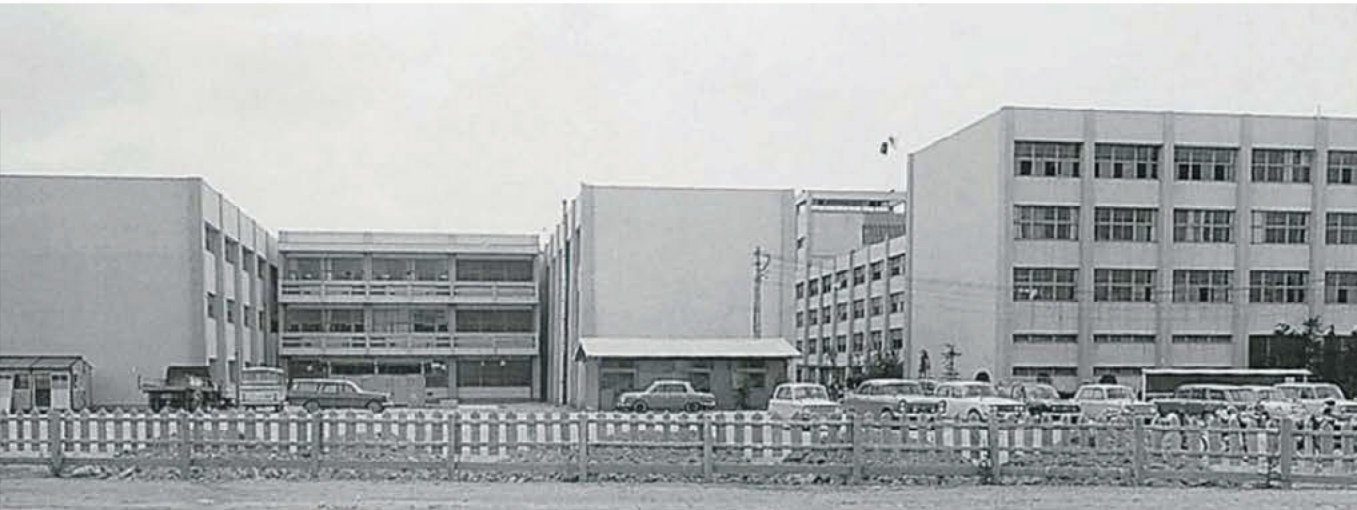
工業化学科、建築学科は2部が設置されていたので旧本館はいつも明かりが夜遅くまでついていた。手前の2階が旧図書館。



開学当時の校友会館で食堂と売店が完備。
木造一部2階建て、唯一の休憩場所として利用されていた。
現在は昭和52年に建て替えられて、建築構造実験室として、
耐震壁の実験が行われている。
(昭和41年)〈旧大学食堂〉



新飯塚駅に程近い、九州工学部の指定学生寮として昭和41年
4月に一番最初に遠方からの学生を受け入れた立岩寮の内部。



昭和43年頃、現体育館付近から見た、旧本館、1、2号館の建物。旧本館横の樹木は、1階部分の高さであった。



旧本館4階の西側に位置するB号講義室は、当時200名以上は
入れる最大の講義室であった。(昭和44年頃)



昭和45年頃になると、県外出身の学生も多くなり立岩学生寮も
本館裏に2階建ての建物を増築している。現在は近代的な鉄筋
コンクリート造りの建物に変わっている。



第一回短大合同卒業式（昭和44年）



3号館建設予定地 憩いの場となっていた。
（昭和55年）



新入生宿泊研修会（昭和56年）



講義風景



化学実験室



電子実験室



図書館書庫



グラウンドから見た2号館



測量実習



電算機演習



パウヒュッテ（平成6年竣工）



旧本館（1、2F）にあった図書館及び電算機センターが、昭和62年完成の新館へ移転し、使用を開始した。



昭和62年頃になると、学生の構内乗入れ車両が多くなる。体育館側の学生駐車場の様子。



構造実験室（昭和60年）



発足当時の同窓会役員会で夜遅くまで会合し、現在の同窓会の礎となった。（昭和62年）



図書館閲覧室



キャンパス風景



平成に入ってから学部全景。周辺には住宅街や工場が出来、30年の歴史の移り変わりを感じる。(平成6年)昭和62年に完成した木工室(地下1F)、就職課、金工室(1F)、産業デザイン学科の実習室、研究室(2F)、経営工学科の実習室、研究室(3F)、教養課程の教員研究室が旧本館より移転し使用されている。



グラウンド奥造成工事(平成8年)



学生第1駐車場後方に第2駐車場造成。(平成8年)



学生食堂(平成20年)



現在の1号館
(平成28年)